超音波検査が有用であった副腎皮質癌の一例

○武岡　真由美，菊川　順子（医療法人恒昭会　藍野病院 検査部），近藤　元治（医療法人恒昭会　藍野病院 内科）

【はじめに】副腎皮質癌は比較的まれな腫瘍で予後は不良である。今回我々は副腎皮質癌の一例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】88歳女性。

【主訴】右側腹部痛。

【既往歴】高血圧、多発性脳梗塞、慢性膿胸などにより外来通院中。

【家族歴】特記事項なし。

【現病歴】平成15年9月めまいを主訴として当院来院。発熱も認めたため精査加療目的のため入院。右側腹部痛の訴えがあり腹部超音波検査施行した。

【入院時所見】体温38.3度、血圧142／64mmHg、CRP19.7mg/dl、白血球7,060/μlであった。

【画像所見】腹部超音波検査において、右腎上極と下大静脈の間に、31×22mmの辺縁不整で内部エコー不均一な腫瘤を認め、左副腎領域に明らかな腫瘤は認めなかった。CT、MRIにより副腎癌もしくは原発巣不明ながら転移性腫瘍が疑われた。約5週後の超音波検査において、腫瘤径37×23mmと増大を認め、CTでも増大が認められたため、平成15年11月右副腎腫瘍摘出術を施行した。

【病理所見】摘出された腫瘍は28gで、組織学的検査により副腎皮質癌であることが確認された。

【考察】副腎皮質癌は出血や中心部壊死を伴う大きな腫瘍として発見されることが多い。画像上質的診断が困難であるが、辺縁不整で内部不均一な大きな腫瘍や、経過観察で早く増大していくものは悪性が疑われるとされている。本症例は、術前に確診にいたらないも短期間で腫瘍の増大がみられたこともあり悪性腫瘍が疑われた。副腎腫瘍の画像診断において、特に大きさの変化を観察することが重要であると考えられた。

【結語】経過観察に超音波検査が有用であった副腎皮質癌の一例を経験したのでここに報告する。

連絡先：072-627-7611